



Title	マルグリット・ユルスナールと日本文学
Author(s)	久田, 原泰子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45713
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	久田原泰子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19130号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	マルグリット・ユルスナールと日本文学
論文審査委員	(主査) 教授 内藤 高 (副査) 教授 出原 隆俊 教授 和田 章男

論文内容の要旨

本論文はフランスの作家マルグリット・ユルスナールの日本文学についての関心と、その関心をもとにして彼女が書いた幾つかの作品について論じたものである。序論、第一部「『源氏物語』と『源氏の君の最後の恋』」、第二部「ユルスナールと能」、第三部「三島由紀夫との同質性—愛と死とアイデンティティー」、第四部「首への偏愛」、及び結びからなる、四部を中心に構成されている400字原稿用紙換算で約1150枚の論文である。

それぞれの部がさらに数章に分かれる大部の論文であるが、第一部では、ユルスナールと『源氏物語』との出会い、ユルスナールにとってその中の重要な人物となる花散里について、花散里についての一般的な理解とユルスナールの理解、ユルスナールの作品である『源氏の君の最後の恋』における花散里の意味などを中心に論じられている。ユルスナールの物語では、源氏の最後の愛人という地位を獲得するために積極的な行動をとる花散里というイメージが強調され、〈男性を追い求める〉女性の苦悩がテーマとなっていることが指摘されている。第二部では、ユルスナールと能の出会いがまず論じられ、『沼地での対話』という彼女の戯曲と、能『江口』が人物構成的な観点から、『班女』がテーマ的な観点から対比して論じられ、さらに三島由紀夫の『近代能楽集』の「班女」との対比がセクシュアリティの観点から論じられている。第三部では、三島由紀夫とユルスナールの文学における共通性を中心に論が展開され、三島『仮面の告白』とユルスナール『アレクシ』に関しては単に愛や死というテーマのレベルだけでなく、語りの形式の共通性が指摘され、『春の雪』と『姉、アンナ...』については、禁じられた欲望の対象としての〈見られる女性〉という観点から比較が試みられる。さらにユルスナールの『黒の過程』という作品にみられる死生觀を三島における自死の問題と関連づけて論じている。第四部では三島の自死とも関連するが、ユルスナールにおける〈首〉への偏愛の問題を、ワイルドの『サロメ』など多くの〈首〉をモチーフとする作品の系譜を辿ることによって考えるとともに、最終的に三島の死が、ユルスナールの創作にもたらしたものについて確認しようとする試みである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、まだ単独でもあまり研究されることの少ないユルスナールについて、日本及び日本文学との関連を深く考えようとする意欲的な論文である。申請者のユルスナールについての充分な知識とテキストの丁寧な読みとが充分

に活かされた内容に富む論文であることは疑いない。申請者は幅広い領域に渡って研究書などをよく読んでおり、多角的な角度からの分析は読者の興味をよく引くものとなっている。ユルスナールによる花散里の独自の解釈と彼女の文学への利用、『沼地での対話』の能への接近の指摘も、対比研究を有効に利用して、説得力のある論を展開している。

しかし様々な広がりを求める大部な論文であるがゆえに、それが論文としての欠点を招いていることも確かである。花散里の日本における解釈の部分、19世紀末の絵画や文学における首のモチーフの問題などについて論じられている箇所は、すでに先行研究や一般書で語られていることを長く辿っているところも多く、この論文の独自性を逆に見失わせ兼ねない。重要な問題の論述が、逆に短くて展開不十分な印象を与える部分がかなり存在する。また論旨の展開の上で、ある論点を展開している途中に、別の論点を持った記述が割り込んでいるような箇所があり、論が辿りにくい所がある。また内容的には、例えばユルスナールと紫式部の家庭状況の類似の指摘など余りに漠然とした形でしか論じられていない点、三島の行動と作品が無条件に同一視されている箇所があるのは問題であろう。その他、また三島のテキストの引用をもっぱら文庫本のみに頼っていること、「～かもしれない」というような断定を避ける文が多く用いられていること、論文で使用する略語の使用的不正確さ、こうした問題は完成した論文としては不十分な点となる。とりわけ誤字・脱字の多さが目立つのは、否定できない事実である。

しかしこうした問題点があるとはいって、それはこの論文のもつ上記のような積極的価値を損なうものではない。よって本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。